

流転、大陸に雄飛

そしてシベリア抑留

山形県 阿部 恵 一

勇躍渡満

戦時中、飛躍的な発展をしていた満州国内鉱工業において、特に中堅現場技術員の養成が急がれており、財団法人日滿鉱工技術員協会は、九州、秋田に次いで、昭和十五年四月、山形県酒田市に日滿工業技術員養成所を急遽設立した。三年間の養成所経費、被服、食費、学費等一切を満州国の負担であることにひかれ、私は選考に応募し合格した。

父に早く逝かれた母は既に満州国四平市にて働いていた。酒田市豊里の砂丘地に新築の校舎・寄宿舎・実習工場が、その偉容を誇っていた。五族協和の趣旨から満州人留学生十人も共に勉強した。多能工の養成を主眼として現場教育を重視、更に満州語の教科は特異

性をもっていた。

昭和十八年三月、三年間の学業を終えて、機械科第一期生として修了証書が授与された。四月、支給された協和服の颯爽とした装いで神戸港から出港、勇躍渡満の途についた。航海中は敵潜水艦の出没の危険にさらされながら、すでに薄暮の大連港に到着、大陸に第一歩を踏んだ。新京行きの列車に座ったとき、瞬間、目にしたのは隣に停車していた戦傷病死軍人の遺骨輸送の車両だった。数段の棚に白布に包まれた骨箱が整然と並び、香煙ただよう中に二人の哨兵が立ち、従軍僧らしい人が読経を唱えているようだ。静寂感そのものだった。どこの戦場からなのかと合唱しながら私は思った。

私の配属先は奉天市鉄西の満州電線株式会社。夜勤を続ける激しい勤めに微熱と疲れがひどく、会社に依頼退職を願って、秋には母の住む四平市に移転した。一カ月ほど、体調を整えて、四平陸軍燃料廠（満州第二三八部隊）に勤めた。四平油化公司を軍に移管させたものらしく、私は工務科製図室で石炭液化装置など

のトレースの仕事をした。

南方派遣動員の輸送車

四平は新京と奉天の中間に在り、南滿州鉄道の交通の要衝であり、更に航空部隊・戦車部隊・補給監部の駐屯する軍都でもあった。駅前大通りを中心に、南一条から、そして北一条から碁盤の目のように整然と街路が走り、街路樹の美しい街だった。満州中部の四平辺りは、まだ、それほど戦況の緊迫感を直接感じなかった。

昭和二十年四月のある日曜日の夕方、散策で行った四平駅貨物構内で停車中の軍用列車を見た。車中の兵の顔は異様に黙々として、隣同士のささやきが車窓に見えた。ホームには憲兵が目を光らせ警戒していた。それとなく耳にしたのは、緊迫した戦況の南方戦線への関東軍將兵の大量の派遣動員だった。四平駅に行くたび、その状況を何回か目撃した。

私は起床洗顔後、日課として、間もなく配属される徴兵任務に向かって、戦陣訓の黙読をしながら近くの四平神社に参拝をしていた。

四月下旬のある朝、神社境内の一晚の急変に驚いた。

境内には軍用幕舎が並んでおり、右往左往するのは物怖じしたように、へっぴり腰によれよれの軍服姿で、一見してわかる急に徴兵された兵隊たちの姿だった。軍靴は支給されないのか毛の厚い防寒長靴を履いている人、青竹の水筒を手をしている人、帯剣などもみかけない。歩兵銃の銃架も見当たらない。私は啞然として木の間から見つめた。一般の人には情報など入るはずもなく、聞いた話では、多くの兵員を南方戦線に派遣した関東軍が手薄となった北辺鎮護の補充のために、一般民間人を大量に「根こそぎ動員」した兵隊たちで、兵員輸送の途中だと聞いた。あの人たちの多くは、今の姿とは異なる人格識見をもたれる人たちだろうし、満州のどこかに妻子や家族を残された人々だろうし、その苦衷を察すると、私は溜息をついてその場を去った。

将校官舎の隣室に居住していた高専電気科出身の佐藤技術中尉は、時折超短波ラジオの音量を絞って深夜の敵国側の放送を受信されていたが、翌朝は握りこぶ

しの切齒扼腕をしていた。そういうことには、黙して語らず、聞かずに習性化されていたが、深刻な表情にみえた。それにしても、陸燃に勤めて気付いたが、表面上は戦時非常事態にあつたものの、一旦緩急あれば、銃弾戦に敢然と立ち向かわなければならぬ兵科部隊のような緊迫感はなかった。四平神社で暮舎生活をしている緊急徴兵された兵隊たちを見たとき、戦況の現実と報道の違いに、疑心暗鬼をいだかざるを得なかった。

五月初め、製図室の屋上に突然、対空射撃砲が装備され緊迫感がよぎった。このころ、公立四平高等女学校の生徒たちが学徒動員によって配属された。廠門を入るとき、整然と隊伍を組みながら士気を鼓舞するために「撃ちてしやまず」の戦意高揚の歌を歌いながらの行進風景に、学園の緊張感を知った。

徴用工員の皆さん

陸燃は、化学系大卒の技術系将校が多く、廠内の雰囲気はおだやかだった。そこへ兵科の少尉が三人入廠して急に気合がかかり、若い我々は戦戦兢兢としたが、

廠しい中にも温情のある方たちだった。陸燃には、軍属の中でも男性の徴用工員の皆さんが多数おられた。前身は商業関係の仕事に就かれていた方が多く、内地の極端な物資不足から、生業が成り立たなくなった方たちで、陸燃前の独身寮に居住していた。前身は、それぞれの立場にあつた方たちだったので社会的経験も多く、ふだんは愛敬もあり職場でも中心的存在だった。軍隊は、いずれにしても階級章がものをいう社会、徴用工員の立場を自己卑下されて自暴自棄の振る舞いをされる方もあつた。もちろん、終戦によりシベリアに抑留された方が多いはずと思つていた。

最近、偶然買い求めた本で、ロシアのバイカル湖の東南に位置する、チタ市に近いウランウデの「日本人埋葬墓地の埋葬者名簿」の所属身分欄に、「四平陸軍燃料廠軍属」と記載されていたのが、三十七人と多く私は愕然とした。シベリア抑留は、千人単位の労働大隊を、敗戦の満州で編制されたらしいので、陸燃の徴用工員もほかの兵隊たちの混成労働大隊に混じつての入ソ、連行されたものと思う。

あの酷寒の地で過酷な労働と飢餓のどん底の中、帰国のみを信じて家族を心配し、望郷の念にかられながら力及ばず、異国の凍土に無念の涙で一人さみしく果てられたことに、私にはほとんど面識のない方たちですが、かつては同じ陸燃の禄を食んだ方たちだと思つと、胸を締めつけられた。

引込線に松の根っこ、山積み

昭和二十年二月ごろからだつたか、廠内の鉄道貨物引込線の脇に松の根が貨車積みされてくるようになってた。石炭液化装置の存在は知っていたが、松根油の採取は知らなかったので啞然とした。戦う日本の現実は、それほどまで軍用燃料に窮乏していたのかと。

大陸の花嫁さん

四月に入ると、厳しい冬からの解放感に心和む季節だ。内地の母の実家に居候していた妹美和子が、高等女学校を卒業して渡満してきた。やがて、連絡のあった新京特別市の駅前広場には、内地から到着した女性だけの集団が、各々の行き先の指示をうけていた。皆一様に大きなリュックサックを背にし、胸には満州の

各配属先と氏名を書いた大きい標識を縫いつけていた。各地の開拓団に嫁いでこられた大陸の花嫁さんたちで、どの顔も異国の雰囲気です惑いと長旅の疲れがみられたが、新天地での活躍に対する期待感が交錯するような面持ちであった。妹は新京におられる縁故者と結婚をされる女性と一緒だったので、大変便宜を受けていたようだった。

混雑の中で、私は肩を強く引っ張られたので振りむくと、眼光鋭い帯刀をした憲兵だ。目ざとく私の陸燃の襟章に目をつけたらしく、軍属なものになぜ巻脚絆をしてないんだと低い声でどなられた。私が非を詫びると立ち去った。戦時態勢下の軍のいる街では、このようなことは日常茶飯事だったが、殴打されずに済んでホッとした。

私たち親子三人が、何年ぶりかの親子水入らずの再会を喜んだ。新京駅前で別れた開拓の花嫁さんたちが、四カ月後には敗戦による大混乱、引揚げまでの惨状悲劇の渦中に巻き込まれるとは夢想だにしなかったと思う。

陸軍航技二等兵として

私は、昭和二十年一月、四平の男子中学校会場で行われた現役徴兵検査の結果、もともと虚弱体質だったので、判定は第三種乙種合格だった。声高く徴兵官に復命したことが思いだされる。兵科と新規の情報兵の内示を受け、入隊まで待機となった。陸燃にも情報兵科の若い少尉さんがおられ、余暇には測量技術などを習ったりして、入隊を待っていた。

軍務こそ男子の本懐といわれた時代。焦躁感の中にいた七月中旬、人事係将校から呼び出され、「お前は現在の勤務の重要性から入隊延期の措置をとっていたが、この八月一日付で本陸軍燃料廠の最初の初年兵として、入隊することになった」と告げられた。戦闘部隊への入隊を心配していた母は、内心安堵しようだった。

八月一日、新しい軍装をしたわずか十人の新兵は、陸燃本部において廠長小川団吉少将から、陸軍航技二等兵となることを命ぜられ、緊張した面持ちで復命、励まされて、陸燃の東門外の野原に建てられた急造の

バラックの兵舎に帰った。初年兵の内務班長は杉山・佐藤・新保の三人の軍曹、廠内では会ったことのない新顔の上官たち、やはり急の転属で陸燃に着任したのだろう。私は酒田の技術員養成所で、軍事教練では鍛えられてきたので、気後れは感じなかったが、班長たちへのマスクをかけての三度の飯上げ、軍靴磨き、洗濯などさせられたのは初めての経験だった。

入隊三日目だった。軍隊では、自分の命よりも大事に取り扱う歩兵銃の手入れのとき、だれかが置き忘れた灰皿が新保班長に見つかり、一喝、「全員互いに向かい合えノ齒をくいしばって足を開けノ阿部は吸わなから一歩退れノ」(私は退らなかつた)と、往復ピントの洗礼を受けた。

ソ連軍怒濤のように侵攻・終戦

昭和二十年一月九日、朝食を終え日課に入ろうとしたとき、三人の班長が血相を変えて内務班に走ってきて、「今朝未明、ソ連の航空部隊、戦車部隊が、突然ソ満国境を突破して侵攻南下中、更に北滿各地で空爆をうけて大混乱にあるとの情報だ。とにかく指示があ

るまで待機せよ」と言い放って班長たちは室を出た。内務班は、皆血の気なく青ざめて愕然となった。

夕方、震えながら手にした満州日日新聞は、特大の活字で「九日未明、ソ連空軍部隊、北滿各地を空爆、戦車大部隊もソ満国境を突破し、侵攻南下中。日ソ不可侵条約を破棄して」と、概要はそのような大見出しだった。何も手につかず茫然として情報と指示を待つ以外になかった。三人の班長の単身か妻帯は聞いてないが、初年兵十人中、四平に家族を持つのは私だけで、独り深刻に心配した。反面、家族は將校官舎街の居住だから、優先配慮の推測もした。

夜ともなれば満人街の方角からは、宿命的な被支配者の辛酸から、日本の敗戦により解放されて逆の立場になった現地満人たちの歓喜の群集の騒ぎ声が、爆竹の破裂音とともに聞こえてきた。一部暴徒化して日本人街に侵入、略奪の被害など、混乱の情報も交錯した。初年兵は班長の指示で交替制の不寝番を立てて、仮眠をとったりしながら過ごした。

八月十五日は、心身疲労に鞭うたれ、うだるような

暑さのところへ、新保班長が、正午に重大な放送があるので、部隊広場に集合するようにと告げて、これを着て帯剣するようにと、渡されたのは、結び紐のついた前合わせの純白のシャツに白無地の手拭、そして遺髪と爪を準備するよう、詳細は後で説明すると言いつつて室を去った。

いったい何なんだと怪訝な面持ちで、喉も通らぬ昼食を流し込み、すぐ隊伍を組んで部隊広場に行くのと、顔見知りの將校官舎の奥さんたち、家族の皆さん、それに市街に居住する軍属の家族たちが、事に備えての身仕度をして、大きなリュックサックや手荷物をかたわらにして、一様に疑心暗鬼の顔で、炎天下の木陰に悄然として座っていた。耳にした話では、部隊の鉄道引込線に列車を入れ、陸燃関係家族を通化方面に疎開させる段取りになっていたが、突然中止になったとのこと（関東軍総司令部は既に通化に移駐していた）。

正午に全員整列、玉音放送に頭を下げ、「堪エ難キヲ堪エ忍ビ難キヲ忍ビ…」の御声に耳を傾けたが、雑音に遮られて聞き取れなかったが、終戦、降伏の未曾

有の事態に陥ったことを告げる重大放送に、全員、嗚咽、嘆息し、うつむいた。家族たちは一応指示あるまでと全員自宅に帰された。残された初年兵には、二週間しか軍隊の飯を食ってないのに一等兵の星二つの階級章が渡され、居合わせた三人の将校が、軍の命令だと言って、ソ連の進駐前に陸燃の廠内にある重要な研究、生産施設は、初年兵をもって決死隊を編成して爆破破壊させるので、命令あるまで兵舎で待機するようにとの指示だった。一瞬、戦慄がよぎったが、離れておののいている母と妹にすべてを話し、遺髪と爪を渡して、水盃を交わした。

あたかも陸燃の象徴かのように東端の製造科に高くそびえ建つ乾溜塔などは、友邦だったドイツとの技術提携によるものだとも聞いていた。軍属もだれもが落ち着かない中、初年兵も加わって、重要書類の処分のために大きな穴を掘り焼却作業や、ほかの雑事に追われた。

将校団、楊木林・新京に抑留

八月十九日だったか、ソ連兵が四平に進入、武装解

除が行われ、我々も手入れをしてきた歩兵銃と帯剣を渡した。班長が言うには、どうやら初年兵たちによる重要施設の爆破作業は中止されたらしいとの話を胸をなでおろした。

九月半ばごろ、ソ連軍の指示で将校と初年兵には、軍衣類など、全部新品のものが渡され軍行李に詰めて、陸燃の北東に在った楊木林の戦軍隊跡の将校官舎に移され、私は、陸燃会計部長の染川大佐と起居を共にした。

平東貨物廠から運ばれた糧秣は十分だったので、ソ連軍が支給する酸っぱくて固くてまずい黒パンは、喉に通らず、便所に落とすなど、苦肉の策をとったりして、毎日過ごした。そのころ、百メートルほど隔てたところを満鉄の連京線が走っており、南下を急ぐように日本人輸送の客貨車が頻繁に通過するのを、手を振って見送ったが、時には、炎天下を走る客車の屋根に、麻袋らしいもので身を覆い、黒髪も振り乱した女性が通過するのは胸が痛んだ。傍若無人で悪辣なソ連軍に急襲された北満の方々らしいとささやかれた。

手持ち無沙汰の中で染川大佐と二人、花園区、陸軍官舎に残してきた家族の安否を語り合っていた十月下旬、午後四平駅から新京へ移動の指示がだされ、夕刻、四平駅の引込線で点呼確認のあと、私と同年兵の平君が貨車一両の監視をせよと、押し込められた。一瞬驚いた。貨車の中には、腸詰と缶詰類がギッシリと積み込まれており、戦時中の物資不足に、見たこともなかった食料（多分平東貨物廠から搬出したものだろう）が、何のためなのかと怪訝に思っていた。

引込線に一晚放置されて、午前中に新京に到着して、連れていかれたのは南嶺の大同学院の学生寮で、行李を整理した途端、使役が割り当てられ、新参組として連れていかれたのは新京駅構内で、我々が四平から分乗監視してきた貨物列車に、更に増結され、大きくロール巻きされた紙類の積み込み作業で、重くて難儀をした。

薄暮になると、そばで戦勝気分の若いソ連軍兵士たちが飲んでおり、我々の手を引っ張ってそれを一気に飲めとコップを出す、度の強いウォッカで、尻込み

して断わる。若い空軍服を着た女性兵士は、私は爆弾投下をしてきたんだと、得意そうに言い放った。腰には拳銃を持っていた。南嶺収容所は有刺鉄線が二重に張りめぐらされ、更に四隅に監視塔で固め、塔屋からサーチライトを不気味に照射しながら、若いソ連兵が立哨監視していた。厳しい語調の将校の示達を押し切つて、夜陰に乗じて決行した脱走が失敗して、朝霧の中に何体かの日本兵の死体がさらされており、震撼とさせられた。

ウラジオストック経由帰国に騙されて

やがて十月下旬、下士官と兵だけに、指揮する将校を加えた大隊が編制されて、新京駅から有蓋貨車に閉じ込められて出発、通訳を通じてのソ連監視兵の話では、ウラジオストック経由で日本に帰すとのこと、ほかに何の情報もないし、他との接触もないので、それに従うしかなかった。もはや、階級制の意識も薄らぎ、貨車の中では、雑多な話や、花札に興じたりして気長に過ごした。大休止のときは、貨車の施錠が外され、鉄扉前の範囲で外気に触れ背伸びをしたり、群がって

集まる満人の物売りから食べ物を買ったり、当番は水を汲んできたりの余裕があったが、貨車の屋根の上や周囲には機銃を持った監視兵が逃亡防止に目を光らせていた。貨車の中の鉄扉脇に直径二十センチほどの水抜き穴があり、異臭も衆目に対する羞恥心もなく排便したり、汚水を捨てたりした。まさに、日々、人格喪失の明け暮れだった。

騙されて虜囚の身に

ハルビン、綏化、北安、孫吳と北上。ウラジオストック港經由の日本帰国を信じての長い貨車生活も、十一月半ばには北辺の最果て、ソ満国境の街、黒河には嚴冬の薄暮に到着した。裸電球の薄暗い浴室で追い立てられながらのシャワーだったが、生き返った気分になり熟睡した。凍てつく朝靄の中に結氷した雪原のように国境の大河、黒龍江が見えた。私物は防寒装具、日用品などの最小限のものとし、行李などはソ連の軍用トラックに積み込んで、結氷の上を徒歩で渡河するとの指示。寒風肌をさす氷上を黙々と歩いた。

たどり着いた対岸の街、ブラゴエシチェンスクは白

樺林が高く林立する歐風の街並み、駅までの徒歩中、スケートの素早い餓鬼とんびに急襲されて防寒帽を取られた兵隊、缶詰を手にした子供が石鹼と交換してやると接近、交換した缶詰の中味は砂と小石だったなど、また難儀して持ってきて、黒河で積み込んだはずの軍行李や私物は、ブラゴエ駅構内に着いてもついに手元へ戻らず、騙し取られた。貨車の天井近くに小さな硝子窓が一つだけの一見して囚人護送車とわかる貨車に施錠、閉じ込められたまま貨車は動かない。

翌朝、線路の入れ換えも終わったころ、発車の汽笛さあ、これからどうなるのかと硝子の小窓に視線を集中、固唾をのむ。やはり期待は裏切られて貨車は太陽の輝きを背にして西に向かって加速した。万事休す。深い溜息が出て気持ち沈んだ。大雪原が果てしなく続き、無計画な輸送らしく途中停車を繰り返しながらチタ駅に着く。日差しのもとでの大休止では車外に出され、ソ連監視兵による身体検査。刃物類の取り上げが理由らしいが、物色しては腕時計、万年筆の巻き上げと、上衣を前開きさせられ女軍医が体格や虱の寄生

を検査した。疲労困憊した。うつろな目に大きな湖が映った。バイカル湖だ。薄暗くなってから下車したのはイルクーツクとのこと、都会風の町並み、月の光に森閑とした山道を監視兵に追いつてられながら喘いだ。精魂尽き果てて睡魔が襲う。「絶対休むな。全身凍傷で死んでしまふぞ」と一喝された。

たどり着いたのは、煤けた丸太小屋二棟、二段に床が組まれ、薪ストーブが燃えている。ドイツ捕虜の労働大隊が居住した跡とのこと。時既に十二月半ば、零下三五度を超えたので作業は休みだが、昼食は小さな茹で馬鈴薯五つだけ。作業は発破を掛けての岩石採掘、虜囚の身には、こたえる重労働、三日目は無理した瞬間、左人差し指をけがしてしまい、化膿して腫れたのを軍医は麻酔なしで切開、疼いて眠れず、夜陰に輝く北斗七星の下で嗚咽した。

十二月下旬、突然に収容所移動の指示、アメリカ製の救援トラックに分乗、凍てつく雪原を疾走して、シベリア鉄道沿線の街、スリニュージャンカ収容所に着く。大隊長は格幅のいい城丸大尉。混乱の終戦の都市の暮

れは異国の地で過ぎて行った。

明けて昭和二十一年は、岩石採掘、二人一組でハンマーと硬質鉄棒で発破穴を穿つ仕事、割った岩石を集積する仕事の二工程だったが、ノルマ達成は難しくソ連人監督一人だけが罵声をあげていた。昼食は小さい黒パン一切れに燕麦の粥も飯盒に分けあつてすすった。粥は高粱や樺太産の練のときもあった。

惨めな捕虜生活

春から夏にかけては、タンポポの新芽を摘んで粥に入れて満腹感をみたり、抑留中の食事は劣悪で皮膚病などの栄養障害に悩まされた。シャワーは回数が少なく、わずかな湯で体をさするだけ、それでも夏季の間はバイカル湖が目の前なので水を浴びられた。時折、女軍医による労働の体力等級を決める身体検査があり、捕虜を一行に並ばせて、軍医が腹部を指でつねり、滑稽にも、その弾力の度合いで一級から三級までの労働可、それに所内の軽労働の級に分けられた。

虚弱体質の私は大体三級だったが、作業内容は一級と同じ。あるとき、三七・三度ほどの微熱が続き、満

州で既往症となった肋膜炎のこともあり、女軍医の間診で病室入院をした（三七・五度以上の発熱のときは休養させる規定があるらしい）。洗面器の大きさの花柄食器に、お粥の朝食があり、逆に閉口したこともあった。

岩石作業については臨時作業命令に憤慨したこともある。ある日、夕刻作業を終えての帰路、貨物列車が入線、動こうとしない捕虜に、「早く積み込め」とソ連監督の罵声が飛び、監視兵は威嚇銃一発放って追い立てた。冷酷無慈悲に耐えた。疲れて帰所すれば人員確認の点呼で一苦勞。日本兵には四列縦隊に整列する習性がある。数字に弱い衛兵は五列縦隊にしないと勘定できない。失笑するのみ。肝腎の日本帰国の情報もない。立ちのうちに、昭和二十一年も暮れた。この厳寒に命果てた日本人捕虜三体の屍体が所内の倉庫に放置されている。どうしようもない諦観というか感覚的に麻痺しており、垣間見て立ち去った。

二年目の昭和二十一年の厳しい冬季間は橋脚建設のコンクリート打ち作業に移動した。寒風の直撃は避け

られたと思ったとたん、こんどは三交替の深夜勤がまわってきた。私は湧水の汲み上げポンプの管理と雑事だったので、労働はさほどでもなかった。我々の夜勤食を見ていた老人の監督が涙して語るには、息子を独ソ戦で失ったことと、戦勝国の自分の食事は捕虜のお前たちより劣っている。スターリンが悪いと唾を吐いた。また若い女性労働者は、子供が欲しがっているから鉛筆をくれと執拗に言う。独ソ戦で消耗したソ連人の物質経済がかなり疲弊していることを知った。

東方に走る帰国列車

春の訪れとともに、大工職や電気工らの優秀ノルマの職場に単独で働いている血色のいい捕虜たちが、東方に走る帰国列車を目撃したとの朗報をもってきた。そのころ、私は顔から指先まで黄色になり、日本人軍医の黄疸の診断で、また病室入院になって、二週間ほど、名ばかりの病室で休養し、回復して所内軽労働にまわされた。ある日、十人ほどで渡し板に簡単な囲いだけの数多い捕虜の厠の凍った人糞を鉄バールで碎いて、無神経にもバイカル湖畔に投棄する作業があり、

あれは軽労働どころか重労働よりひどかった。

昭和二十二年六月上旬、その日の作業配置は糧秣倉庫の整理作業に五人の割当て、ソ連主計将校の指示で作業をしていた。ところが正午前、息せき切りながらソ連将校と通訳がきて「作業中止。ただちに私物を整理して収容所前に集合せよ」とのこと、集まった二十人の軽労働組が氏名を呼ばれて、お前たちはダモイ（帰国）だと告げられ、突然のことに呆気にとられたが、内心小躍りした。一方、満州を出て以来、苦難を共にした初年兵九人、内務班長たちの下士官に挨拶もしないで、一足早く帰国することに心苦しさとも一抹の寂しさを感じたが、成り行きに任せた。駅貨物構内で停車中の帰国大隊に合流した。発車した列車の進行方向は間違いないく東方、微笑を含んだ監視兵も貨車の扉を少し開けてくれ、入る涼風が心地良かった。順調な貨車輸送のうちに、終着地ナホトカに着く。

ナホトカ収容所には先着の大勢の捕虜たちが砂浜に幕舎生活をして帰国船を待っていた。夕刻ともなれば、捕虜のアクチブたちが仮設ステージの壇上に立って握

り拳を上げて、偉大なるソビエト共産党の指導と人民の団結を礼賛する演説を繰り返しており、捕虜たちも上刃だけ割れんばかりの拍手をした。またアコーディオン伴奏で何回も練習させられた「インターナショナル」と「メーデーの歌」の捕虜たちの大合唱が夜空に響いた。ナホトカ港を真下に眺望できる丘陵には、祖国日本への帰国を目前にしながら、一人寂しく異国の地に病没された将兵たちの木の標識が肅然と立ち並んでいるのが見えた。遠くから黙礼する。

帰国船「永禄丸」

昭和二十二年六月十三日の午後、黒煙を吐きながら大きな船体が接岸、乗船者名簿の確認に手間取りながら、帰国船永禄丸のタラップを足どり軽く踏んで乗船、日本人船員と看護婦さんたちに拍手で迎えてもらった。あのときの安堵感と感激は忘れられない生涯の思い出だ。日本海の荒波高く三日間の船倉では、心身の疲労と船酔いで青ざめ放心状態だったが、平穩裡に、六月十六日舞鶴港に無事接岸、検疫、全身のDDT消毒に苦笑しながら、歓迎の人垣の中を宿舎へ、帰国申告の

書類提出を終えて一泊、帰心矢のごとし。そして敗戦の衝撃の大きい日本でのこれからのことが交錯するなかを車中で過ごした。

「国破れども山河あり」故郷大石田の変わりない平穏な町並みに心落ち着く。シベリア抑留中、心配しどおしだった母と妹は一年前に無事帰国しており、私を出迎えてくれた。母は神仏の加護に感謝した。

亡き父の実家が駅前旅館なので、私たちは取りあえず寄寓させてもらい、母は一生懸命手伝っていた。抑留中の粗悪な食事のために、髪の毛も茶色になるほどのひどい症状に、栄養失調だと医師の診断、急激に普通の食事をしないで、粥から徐々に慣らすようにしなさいと指導され、そして少し休養をとった。終戦後の全体的な、特に経済的疲弊の中で、リュックサック一つで帰国した海外引揚者にとって、その再起のための努力は並大抵ではなかった。

旧陸軍工兵隊の廠舎を改造した仮住まいで、隣の家族とは板張り一枚の囲い、そして一部屋に親子三人で建坪わずかに九坪しかない引揚者強制疎開住宅に入居

したり、居住生活ではかなり苦労したが、国、県としても精いっぱい配慮だったのだろう。この昭和二十七年に雑草生い茂る野原に建てられた二十三戸の疎開住宅が創始者となり、現在では百戸を超える地区になり、流転、数奇な運命をたどった私の安住の地になったことに感謝している。シベリア抑留から帰国して休養後、当時、石炭、亜炭には統制経済がとられており、臨時措置法による配炭公団に就職、北海道の滝川石炭分析所への転勤も経験した。

昭和二十八年、地方自治体も国民健康保険制度が創設されて、要員として大石田町役場に奉職、以来、三十四年の永年勤務をさせていただいた。昭和六十二年、四十二年ぶりに懐旧の地、中国吉林省四平市を再訪した。かつて勤めた旧四平陸軍燃料廠（満州第二三八部隊）は現在、吉林省四平聯合化工廠となり、旧陸軍の建物は衛門、部隊本部など、昔の姿で使用されており、昔を想起させてくれた。陽炎の彼方には、最初に連行された楊木林の緑の丘がまぶしく見えたし、見渡す限りの高梁畑の地平線の彼方に沈む夕陽は、ほんとうに

素晴らしい光景だった。

【執筆者の横顔】

阿部恵一氏は、大正十五年七月生まれで五歳のとき父親と死に別れ、もとより頑健な体でなかったが、思想堅固、母親思いが強く強靱な心の持ち主に育った。

昭和十一年知人を頼って母親は満州国吉林に渡満、その間、祖母に育てられた。

昭和十五年高等小学校を中退し、酒田日満鉱工業技術員養成所機械化入所、十八年三月卒業して、満州国奉天鉄西区の満州電線株式会社就職となった。

戦時下の会社事業は繁忙、雑務の真っ只中に体をこわし、十八年十月に依願退職のやむなきに至り、四平市で働いていた母親のもとで休養につとめた。

十八年十一月、健康体になったので、四平陸軍燃料廠満州第二三八部隊に入隊、二十年八月終戦により陸軍航技一等兵に任命されて同日武装解除され、ソ連軍により四平市楊木林に連行された。十日新京に集結し、大隊は編制させられて満州を北上し、ウラジオストク

クから日本へ帰すなどと言われ喜んだが、イルクーツク捕虜収容所で強制労働を課せられた。

寒風肌をさすブラゴエシチェンスクにたどりついたが、黒河で積み換えしたはずの軍行李や私物は、ブラゴエ駅構内についてもついに戻らず、だましとられた。

阿部氏ら九人の捕虜は、幸いにソ連軍女性軍医看守からの指令もあって、わずか二年足らずの捕虜生活で終わったことは、不幸中の幸いであった。

一年前に帰国された母親と妹との感激の再会の涙は終生忘れられないであろう。

昭和二十八年四月、北村山郡大石田町役場に奉職以來、昭和六十二年一月定年退職までの三十四年間を顧みて感無量であろう。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助